

不活化ポリオ ワクチン

ポリオ（小児まひ）はかつての日本で流行をくり返していましたが、予防接種によって自然の罹患は激減しました。一方で生ワクチンの副作用（ワクチン関連まひ）が問題になり、平成24年9月からは、より副作用の少ない「不活化ワクチン」を用いることになりました。

当初は単独ワクチンですが、11月以降は三種混合ワクチンに加えた「四種混合ワクチン」も発売される予定です。



予防接種の注意・お願い

予防接種を安心して受けるために、いくつかのことを心がけてください。

- 受ける予防接種について、病気のことやワクチンの効果・副反応などについて、あらかじめ知ってほしいと思います。市町村からの文書や、育児書（雑誌）なども参考にしてください。分からないことなどがありましたら、会場の職員や医師にたずねてください。
- 健康状態の良い時に受けましょう。心配なときは無理せずに延期したり、医師に相談してください。
- 前日は入浴して、体を清潔に。
- 予診票は、良く読んで、きちんと記入しましょう。
- 母子手帳も忘れずに。（個別接種では、念のために保険証も）
- 接種の会場で、体温を測り、記入します。
- 予期できない重篤な副反応が、注射のあと15～30分以内におきることがあります。すぐに帰らず、しばらく会場で様子を見ててください。
- 接種の当日は、入浴をふくめていつもと同じ生活でいいのですが、激しい運動はさけてください。



ポリオは「小児麻痺(まひ)」と呼ばれ、子どもたちにまひをおこすことがある感染症です。足が動かなくなるだけでなく、まひが重いと呼吸筋がおかされ、命とりになることもあります。

かつて日本でも大流行があり、こわがられていた病気なのですが、昭和30年代に経口生ワクチンの投与が開始され、劇的に患者さんが少なくなりました。しかし、東南アジアなどの開発途上国ではいまだ蔓延(まんえん)しています。

経口生ポリオワクチンは毒性を弱くしてあり、通常は病原性はありません。しかしまれに腸管中で増殖する時に毒性が現れ、本人と周囲にワクチン関連まひを発症させることがあります。このため、自然のポリオ流行がなくなった先進国では、より副作用の少ない不活化ポリオワクチンを主に使っています。

日本では対応が遅れていましたが、ようやく不活化ワクチンへの切り替えが行われます(平成24年8月で生ワクチンを終了し、翌9月からは不活化ワクチンでの接種になります)。

当初は海外からの輸入品(イモバックスポリオ)を使って接種を行います。生後3か月～7歳半の方が対象で、合計4回の接種を行います(接種スケジュールは三種混合と同じ。生ワクチンを1回受けている方は3回の接種です)。

11月以降は三種混合ワクチンに加えた「四種混合ワクチン」が発売されます(国内製)。原則として同じワクチンを最後まで使うことになっていますので、ご注意下さい。

当初はワクチンの供給が安定しないことも考えられるので、自治体の案内にしたがって接種を進めて下さい。

不活化ポリオワクチンの予防接種

【法定接種】 生後3か月～7歳6か月未満

合計4回の接種

初回3回：3～8週の間隔(当面は8週を過ぎていても可)

追加：初回から半年以上あける(12～18か月が望ましい)

※すでに生ワクチンを1回接種している場合：合計3回の接種
(生ワクチンからは中27日以上あける)

初回2回：3～8週の間隔(当面は8週を過ぎていても可)

追加：初回から半年以上あける(12～18か月が望ましい)

【接種方法】皮下注射

予防接種を受けたあとの注意

※予防接種の副作用として、ごくまれに、注射の直後に急に具合が悪くなることもあります(アナフィラキシー・ショック)。万一のために15分程度は医院の中にいていただき、そのあともしくは早くは医院にすぐひきかえせるようにしててください。(その場で適切な処置をすれば、最悪の事態は避けられます。)

不活化ポリオワクチンは不活化してあるワクチンです。

ほかの予防接種は、1週間以上(※)たってから受けてください。

※接種の翌日から次の接種日の前日まで6日以上

不活化ポリオワクチン

- ①注射したところは軽くもんで下さい。
- ②丸一日は激しい運動は避け、普通の生活をして下さい(入浴はかまいません)。
- ③接種したあと、当日や翌日などに熱をだすことがときにあります。ほとんどはそのままでおさまります。
- ④注射したところが赤くなったり、はれたりすることがありますが、そのまま数日でおさまります。